

昔はここも海だった！？

～堀内貝塚から安城の海を探る～

桜井中学校 2 年 伊藤 千紗

昔はここも海だった!?

～ 堀内貝塚 から安城の海を探る～

安城市立桜井中学校 2年D組 伊藤 千紗

〈きっかけ〉

私の家の近くには、堀内貝塚があります。貝塚とは、昔の人が食べた貝や動物の骨を集めていた場所が遺跡となり出土したところで、比較的海の近くにあります。

しかし、現在の安城市には海がありません。一番近くでも三河湾で、簡単に往ける距離ではありません。ではどこに海があり、堀内貝塚にあった貝は、どこに生息していたのでしょうか。

疑問に思ったので、いろいろな視点から調べてみることにしました。

〈堀内貝塚について〉

碧海台地の東の辺縁部（現在の堀内公園北側駐車場）に位置し、1927年の道路工事中に発見され、その後調査が行われました。

面積は、300㎡と比較的小さい貝塚ですが貝層は1mあり、出土品も多いため、「情報量の多い貝塚」といえます。

その中でも貝殻が大半を占めており、当時の人々にとって、貝は大事な主食の一つでした。貝は安全に採れ、栄養的にも優秀な食材だったからです。

■ 時代 … 縄文時代晩期（約2700年前）

■ 出土品 … 貝殻（ハイガイ・マガキ・ハマグリ・アサリ・タニシなど）

動物の骨（鹿イノシシ・マダライ、ウサギ、ウミガメ、コイ・ウナギ、ナマズ）

人骨、墓、縄文石器、石器、植物遺物 など ※ 住居跡は見つかっていない。



一部が折入張り
当時の見層を見ることのできる

〈仮説〉

去年の自由研究で、古墳時代を調べたところ、その時代の尾張地方は大部分が水没していたことがわかりました。三河地方も同じ状況で堀内貝塚から比較的往ける距離に海があり、そこで採取していたのでは？と仮説を立てました。

堀内貝塚から出土されたものや、現在の地図や昔の地図を参考に調べていきます。

〈調査内容〉

「堀内貝塚の貝はどこで採れたのか？」を調べる事で、その当時の海岸線が想定できるのでは？と考えました。

そこで、インターネットや書籍を参考に以下の4項目について調査を行い、自分なりの考えをまとめたと思います。

- | | |
|-----|-----------------|
| 調査Ⅰ | 距離から考える |
| 調査Ⅱ | 堀内貝塚から出土した貝を調べる |
| 調査Ⅲ | 近くの貝塚を調べる |
| 調査Ⅳ | 縄文時代晩期の地形を想定する |

調査Ⅰ 距離から考える

縄文人の移動手段は、主に徒歩です。

縄文人の男性は、155~160cmで、現代の女性と同じぐらいの身長のため
時速4~5kmと仮定しました。

また、干潮の時間や、現地で採取する時間も考え、片道2時間程度
で帰ってくる必要があります。

しかも、採れた貝は重く、一度に大量に運ぶのは難しいことや、長期で
保存できないため、頻繁に取りに行くだろうと考えました。

つまり、徒歩で行ける範囲としては、8km程度が限界だったの
ではないでしょうか。



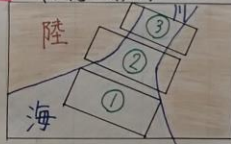
調査Ⅱ 堀内貝塚から出土した貝を調べる

以下の表に出土した貝の種類と割合、生息場所をまとめました。

貝の種類	写真	出土割合	生息場所
ハイガイ		63%	②
マガキ(カキ)		20%	②
ハマグリ		3%	①
アサリ		8%	①
タニシ		少量	③
アカニシ		少量	②

↳ その他、ナメタニシ 1% その他=軟体動物 3%、巻貝 2%

〈生息場所〉



- ① 海の近くの「干潟や砂浜(潮の満ち引きがある場所)」にすむ貝。
- ② 川と海が混ざる「汽水域(河口や入り江)」にすむ貝。
- ③ 川の中など「淡水(真水)の場所」にすむ貝。

その結果、堀内貝塚は、②の汽水域に生息する「ハイガイ」と「マガキ」が約80%を占めていた事が分かりました。つまり、安城から汽水域まで採りに行っていたと予想されます。

しかし、今の安城には、汽水域どころか 海自体ないのです。

調査Ⅲ 近くの貝塚を調べる

安城市周辺の貝塚の場所と、出土した貝の種類をまとめてみました。

西三河の貝塚は大きく2つの区分に分ける事が出来ます。表にはそれぞれどの貝が主体となっているか
また現地に行って気づいた事、感じた事を書いてみました。

〈西三河の貝塚の
2つの区分〉

ハイガイ主体の貝塚

汽水域(川と海が混ざる場所)で採れた貝が多い貝塚
他にマガキ、アカニシ

ハマグリ主体の貝塚

海の近くの(干潟や砂浜)で採れた貝が多い貝塚
他にアサリ、サルボウ

< 安城市周辺の貝塚 >

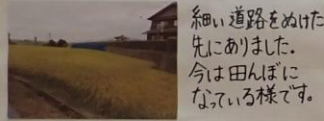
① 堀内貝塚 ● ハイガイ主体・堀内町

② 東端貝塚 ● ハイガイ主体・東端町



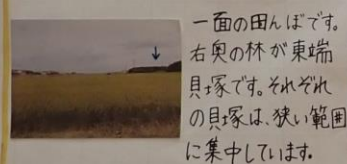
林の中に貝がたくさん落ちていました。
おそらくハイガイとマガリの貝殻。この2種類が多かったです。

③ 寺下貝塚 ● ハイガイ主体・東端町



細い道路をぬけた先にありました。今は田んぼになっている様です。

④ 道成貝塚 ● ハイガイ主体・東端町

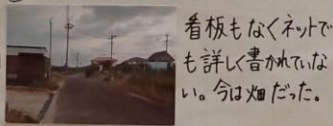


一面の田んぼです。右奥の林が東端貝塚です。それぞれの貝塚は、狭い範囲に集中しています。

ハイガイ主体の貝塚
ハマグリ主体の貝塚



⑤ 貝ス貝塚 ● ハイガイ主体・城ヶ入町



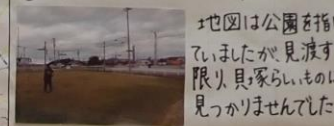
看板もなくネットで詳しく書かれていない。今は畑だった。

⑥ 八王子貝塚 ● ハイガイ主体・西尾市上町



あちこちに貝殻が落ちていました。あまりにも多く落ちていたので、本当に昔の時代の貝殻なのか疑ってしまいました。

⑦ 清水貝塚 ● ハイガイ主体・西尾市中町



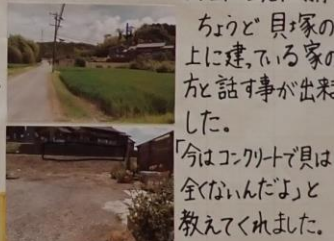
地図は公園を指していましたが、見渡す限り貝塚らしいものは見つかりませんでした。

⑧ 枯木宮貝塚 ● ハマグリ主体・西尾市巨海町



今は中学校が建っています。少し貝殻を見つけました。

⑨ 釜田貝塚 ● ハマグリ主体・西尾市上羽町



ちょうど貝塚の上に建っている家の方と話す事が出来た。
「今はコンクリートで貝は全くなんだよ」と教えてくれました。

デンソー西尾製作所の近くに位置し、裏には山があります。本当に海が近かったのか？と不思議に思いました。

ハイガイ主体の貝塚は、堀内貝塚から南西方向に集中し、ハマグリ主体の貝塚は南東方向に点在していました。
つまり、堀内貝塚で採った貝は、南西方向に採りに行ったと考えました。

そこで調査Iの考え方(徒歩8km圏内)にあてはめると「堀内貝塚」と「ハイガイ主体の他の貝塚」の共通する地域は、図の赤の部分になります。
この部分に「汽水域が存在していたのでは？」という考えに至りました。

調査IV 縄文時代晩期の地形を想定する

仮説にも書いたように、縄文時代は今よりも海岸線が内陸側になったことが分かります。特に縄文時代前期(6000~5000年前)には、「縄文海進(じやうもんかいしん)」という海面上昇が起きました。当時は今の気温よりも2~3℃高く、それにより氷河がとけ、海面が今より2~3m、地域によっては5m以上高くなりました。

堀内貝塚ができたと思われる晩期(2500年前)においても、ピークは過ぎていましたが、まだ海水が入り組んだ状態でした。

そこで、現在の地図をもとに、海面高さを3m上昇させ、縄文時代の地形を想定してみます。



〈今より3m海面が高かったら?〉

← 当時の海面よりも低い部分が青くなっています。これが縄文時代晩期の地形に近いのではと考えます。

地図上では、西三河の大部分が青く、調査Ⅲで割り出した部分にも水が来ていたことが分かりました。

そこに何らかの形で海水と川の水が混ざり合い、汽水域を作り出していたのでしょうか。貝塚がある場所とも一致します。

以上のことから、堀内貝塚から徒歩8kmの範囲に汽水域があった可能性がより高くなりました。

検証 昔の地図と比べてみる

調査Ⅳで想定した当時の地形は合っているのか、昔の地図を集めて見比べてみました。年代が古いほど確実な地図がないので、地図として存在する大正時代からさかのぼってみます。



〈大正～明治時代〉

1918年(大正7年) 碧海郡全図



1890年(明治23年) 明治23県図



1879年(明治12年) 三河国全図



地図を見る限り、
現在と変わらない
様に見えます。

〈江戸時代の国絵図〉 国絵図とは、江戸幕府が全国の諸藩に命じて作らせた日本全土の地図

1838年(天保9年) 天保三河国絵図



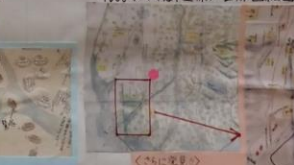
1701年(元禄14年) 元禄三河国絵図



1672年(寛文12年) 寛文三河国絵図



1600年代(元禄正保) 正保三河国絵図



地図をさかのぼって調べた所、寛文の国絵図が調査Ⅳで想定した縄文時代の地形に似てきたのです。そして、正保の国絵図で開きがほぼ一致しました。油ヶ洲(安城と碧南にまたがる淡水湖)のあたりは入り江で海とつながっていました。

つまり、仮説通り安城には海があったことがわかりました。

国絵図からは、正確な距離を測ることができませんが、今もある『東ハタ』『城ヶ入』という地名の記載がありました。調査Ⅳで想定した地形でも、『東端町』『城ヶ入町』は海に沈んでおらず、油ヶ洲に対して、同じ位置関係になっていました。

つまり、このあたりに川の水と混ざり合う汽水域があり、堀内貝塚からも貝を採取にきていたと考えられます。具体的にどの場所で採取していたかは不明ですが、入り江の東に位置する城ヶ入町や米津町あたりが堀内貝塚から最も近く、今の地図で調べるとだいたい15kmを越える距離でした。

〈安城の海のその後〉



安城の海は、長い間「比浦」とよばれる入り江でした。

東端貝塚からは製塩土器が見つかり、12世紀末の資料には、和泉町に「泉衛園」とよばれる伊勢神宮領があり、舟の出入りも頻繁にありました。

しかし、江戸時代に矢作川の氾濫を防止するための矢作新川の開削や、年貢を増やすための新田開発により、海から切り離れ、今の「油ヶ淵(湖)」に姿を変えて存在しています。

人の手により地形が変わり、最終的に安城市から海がなくなった事も合わせてわかりました。



① 現在の油ヶ淵
安城市最南をまたぐわた
る水門として存在。
周りに田畑があります。



② (比城)入口の辺りで貝を採っていた?

住宅地と田畑の境界がよく
分かります。
もう少し、江戸時代に新田開発された
部分で、土壌が赤く田畑の中に存在
しているのでは?と想像しました。



③ アイラン 藤井工場跡地

この辺りまで、入り江(比浦)にやがてなる
部分だった様です。
思っていた内陸側まで海だったのだな
と実感しました。

★ 堀内貝塚からおよそ4〜6 km
この辺りまで貝を採取に行っていたと推察します。

〈まとめ〉

現在の安城市には海がありませんが、「海がもともとあった街」だということが分かりました。海から遠い堀内貝塚から汽水域にすむ貝が多く見つかったことや、周りの低地の地形がその証拠です。

当時の人たちは、入り江だった油ヶ淵周辺まで歩いて貝を採りに行き、それを持ち帰り、食べて生活に役立てていました。

安城の海は、食べ物だけでなく、人々の暮らしや文化にも大きな影響を与えていたのだと考えます。

今は田んぼや住宅地になっている場所が昔は海だったことはとても不思議で、地域の歴史を知る大きな手がかりとなりました。

〈感想〉

最初は「安城には海があったのか」を何となく調べていたのですが、その背景には当時の食べ物、生活、地形など様々なことが関わっていることが分かり、とても面白い研究テーマだと気づくことができました。特に堀内貝塚の小さな貝殻を手がかりに、当時の海の広がりを見えてきたことは、驚きました。

今回の研究を通して、別々に考えていたこともつなげて考えると新しい発見が生まれることを学びました。普段の生活においても、様々な視点から考えることが大切だと感じました。

そして、今ある景色も昔の人の生活や自然の変化とつながっているのだと考えると、より興味深感受します。また、自分の身近な地域のことを調べてみたいと思いました。

〈参考文献〉

安城市史 1 原始・古代・中世 2 近世 7 資料編近世
10 資料編考古 11 資料編 自然

愛知県史 資料編 18 近世 4 西三河

企画展 東海の貝塚
特別展 龍燈の湖
特別展 国絵図の世界
村絵図Ⅱ

安城市内村絵図集補遺 (安城市教育委員会)

国土地理院ホームページ
安城市 デジタルアーカイブ
西尾市 岩瀬文庫 データベース
その他 インターネット